

日本におけるバクーニン文獻

日本で翻訳されているバクーニンの論文は僅かしかない。一応纏まっており、案外手に入りやすい本は『神と国家』一冊ぐらいである。戦前バクーニン選集の発行が社会理想研究会によって計画され「ロマーニアの同志」や「第一インターナショナルの分裂に就いて」等の載っている第五巻をはじめに三巻だけ発行されたが、発禁にあつて現在では古本屋で探しても無駄骨を折るぐらい僅かしか残っていない。戦後では先頃、雑誌『自由思想』に遠藤斌が「マルクシズム、自由および国家」の翻訳を載せており、また現在翻訳を完成して発行に移そうとしている久保義一『バクーニン革命論文集』（仮称）があと数ヶ月で我々の手に入れることのできるバクーニンの論文であるという状況である。

『神と国家』（改造文庫、第一部十四篇・本荘可宗訳・昭和四年発行）は古本屋を探せば手に入れることのできる一冊の書に纏っている唯一のバクーニンの論文で、本来の『神と国家』とは違っているそうだが、バクーニンの思想を知るには一番よい本である。もっともこの本は翻訳がわるくしかも権力によって〇〇とか……という穴があけられているために、非常な根拠と想像力を必要とされる書であることを注意しておく。この『神と国家』は一八七〇年の終り頃から七一年の初めまでに書かれた書簡を寄せ集めたものらしく二三章に分けられており、大体「唯物論と観念論」「神・宗教」「国家」

「科学」「理想主義」「ロマンチズム」等の問題を分析して批判したものである。その中で特に現在注意しなければならないのは科学を扱った部分で、「科学は人生のコンパスである。が併しそれは人生そのものではない」という言葉にみられるようにバクーニンは科学を人間疎外のひとつとして分析し、生（人間）を追求しようとしていることである。この態度はむしろ科学を問題にするときだけにあらわれるものでなくこの『神と国家』全体を貫いているもので、その意味では物化（疎外）された人間世界の現実（神・国家等々）への叛逆の書とも言えるものである。

『マルクシズム、自由および国家』（雑誌『自由思想』2—4号に連載・遠藤斌訳）はバクーニンの諸論文のうちからマルクスとマルクス主義を批判したような部分を抜き出して纏めたもので、バクーニンの論文構成ではないので一部と一節とがあまりよく結びついていない部分もある。だが現在のようにマルクス主義が一つの権力的勢力を占めている時期においてはこの種の論文は貴重な価値を持っている。内容は題名が示しているように国家を軸として展開されており、ここからバクーニンの国家論の一端も知ることができる。彼の言葉でいえば「階級」、「権力」、「国家」、は三つのわちがたい語であることをこの論文は述べているのだが、編纂者はマルクスを汎ゲルマニストとして批判したりするバクーニンの個人的・党派的意見を若干含ませてしまっているのでその点を考慮して読んだ方がよいのではないかと思う。

(T・E)

「永久革命」

壇 谷 雄 高

「現存する組織制度に対する絶えざる斗争、これを名づけて吾々は『永久革命』という。もし他に社会運動を制御し、緩慢にせんとする者があつても、人類の前進を阻み得ないことは、彗星の流れを阻み得ないと同様である。」

この言葉は、誰にも受け入れられ誰の胸裡にも育まれる強い理念がそこにありながら、具体的な形態としては明確な輪郭をもって私達の前に定着されるに至っていないアナキズムの本来的な性格を指示しているように思われる。

現存する組織制度に対して絶えず叛逆者となること——これは、現在も行われているし、また、近い将来にとりやめられるようになると思われぬが、前記の言葉は、一八七六年、ベルンで開かれたインターナショナルの大会において、マラテスタが演説したところのものである。一八七六年はバクーニンが死んだ年であるが、「永久革命」とはトロツキに附着した標語であると思いがちな私達に対して、このマラテスタの言葉は、むしろ、アナキズムの本質にとってこの用語こそが適わしいと鋭く啓示する点で極めて貴重であると思われる。

アナキズムの理念は、私達が自己の存在について自覚的になつたときつねに懐かれるものであるから、私達の歴史の長い幅のなかにあま

伝記を書いていると紹介されていても、それらの著作のひとつも私達の手許には送られていないのである。

私達は、例えば、ドストエフスキイの生活の或る部分を覗いてみても、彼がロンドンのゲルツェンのところを訪れたり、スイスでオガリョーフに借金したりする場面に遭遇して、同時代人達が目に見えぬ大きな網の目のような枠のなかで互いに関連をもち、思想的な影響を与えあっていることに気が付き、驚くことがある。そして、或る小さな部分と部分を繋ぎあわせて、ひとつの時代的な肖像画と風景画を眼前に思い描いてみるのであるが、それがあまりにも小さな、不正確な、曖昧な構図にしかすぎないことに、またすぐあとで気付かざるを得ない。恐らく、アナキストの生活とアナキズムの思想ほど、系統だてられないままに、私達の前に未開の暗黒となっている領域は少ないのではないかと思われはどである。

エドモンド・ウィルソンの意見によれば、バクーニンのインポテントな事態は近親相姦の抑圧から発したという。妹タチアーナに対する愛情とその妹が愛するペリンスキイに対するバクーニンの異常な嫉妬はややその事態を暗示するがごとくである。そして、二十六才年下の妻アントニアが他の男によって二人の子供を産んだのに対して懐いて

いる愛情は、いわば、私達の未来をも含めて、性生活の不思議な陰面と陽面のかたちを暗示しているがごとくである。このような生活の微妙な深さは、バクーニンの思想の大きさに劣らず、私達の生の全体にとって示唆的である。大沢正道の『バクーニンの生涯』をはじめとして、この種の緻密な仕事で、これから多くなされることが望ましい。

思想の部面における現在の大きな主題は、社会主義「国家」における権力の在り方の分析であろう。国家が軍隊と警察という暴力によって支えられていることは現在でも変化していないが、そこには怖るべき内容の変化があつて、原子爆弾を背負わなければならない時期に遭遇した社会主義「国家」は、もし自覚的であれば、この上もない怖るべき難題に直面しているのである。これまでの武器は自覚的な操作によって、敵を狙うことをやめ、敵を捕虜にし、さらに、味方にさえしてしまふことの可能性を与えるところの武器であり、換言すれば、抑圧の武器はまた革命の武器へ転化し得るものであったが、現在、益々発達しつつある原子力兵器は、敵のなかの味方を判別し得ない点で怖るべきものであるのみならず、発射する兵士に敵を直視し、自己の判別力を自覚する契機をまったく与えず、国家の意志がすべてをひきうけてしまふとする巨大な無思想性においてさらに怖るべきものである。このような巨大な無思想性の怪物に成長するに至ってしまうとき、国家はもはやついに死滅することなどできない。もし自己の現実について自覚的であれば、これこそ社会主義「国家」が直面しているところの一つの怖るべき難題なのである。

アナキズムの見地から深い分析と鋭い考究がこの現代の巨大な主題に対してなされることを私は望みたい。

スペイン革命の 教えるもの

B6 上製箱入美本
三二〇円(千五百円)

V・リチャーズ著・遠藤斌訳
1936-39年スペイン人民は真の社会革命への道を開いた。豊富な史料を駆使してその真相を語るアナキストによる本邦最初のスペイン革命文獻。

川崎市新丸子東一の自由思想研究会
八三三三 甘露書房 (振替東京四四六九〇)

自由思想の会編集

自由思想 5号

権力の本質とその意義	長谷川 進
ソビエト権力	マクシモフ
禅・華嚴・アナキズム	市川 白弦
大逆事件の思想的背景	幸徳秋水の(下) 遠藤 斌
宿命論の一点一萩原朔太郎覚書	伊藤 信吉
思い出すまに(3)	近藤 真柄
わが生涯を生きて	エマ・ゴールドマン
パブロ・カザルス来朝に寄せて	スペイン難民救援 日本友の会
テロリズムをめぐる	久保・高島・田戸・小松
[登壇] エマ・ゴールドマン	大沢 正道

クロンスタット (1)

—1921年—

ヴォーリン

谷 千香子 訳

訳者まえがき

『知られざる革命』は、ヴォーリンの死の直前一九四五年に完成した。これは一八二五年十二月党勃興の年から一九二二年すなわちボリシエヴィキによってアナキストの運動が決定的な潰滅へと追い込まれた年までのロシア人民の革命運動の膨大な研究書である。ここに訳出した「クロンスタット——一九二一年——」は「知られざる革命」の第二巻第一部にあたる。この書の第二巻第二部は一九一八年から一九二一年にかけてロシアのウクライナ地方に起ったネストル・マフノを中心とするアナキズム運動を扱った「ウクライナ——一九一八—一九二一年——」であり、これも、引き続き翻訳発表したいと思っている。

ヴォーリンの本名は Vsevolod mikhailovich Eichenbaum といい、一八二二年にロシアに生まれ、一九〇五年の革命に参加、一九〇七年フランスへ亡命、一九一五年反戦活動のためフランスを追放さ

ある人民の自主組織を撲滅し、ボリシエヴィキの官僚的政治権力に批判の眼をむける革命家や人民を反革命主義者として弾圧投獄した。ヴォーリンは、その後ボリシエヴィキの犠牲者の一人としてベルリンに亡命、のちパリへ移り、隠れ家を転々としながら本書を書き続け、一九四五年秋に死ぬ少し前に完成した。

大杉栄がベルリンのアナキスト大会へ出席しようとヨーロッパへ行った時、彼はベルリンにいるヴォーリンに会ってぜひマフノ運動の全体や詳細について知りたいと切望していたのだが、パリで投獄されたりして果さなかった。クロンスタットに関してはアメリカからロシアへ強制送還されたアナキスト、ベルクマンがその眼で見て「クロンスタットの叛逆」を書いた。最近パンフレットとして刊行されたが、これはぜひ合わせ読む必要のあるものである。